

## 琉球大学医学部附属病院臨床研修医と 沖縄県医師会との懇親会

常任理事 安里 哲好



研修医1年生の皆さん

去る平成18年4月3日（月）琉球大学医学部・がじゅまる会館にて琉球大学医学部臨床研修医およびRyuMIC（Ryukyu Medical Interactive Collaboration）研修医と沖縄県医師会との懇親会が開かれました。

懇親会に先立ち、7日間にわたる研修医オリエンテーションの最初の日に宮城信雄会長より「地域医療について」、真栄田篤彦常任理事より「医師会の事業と医賠責」と題しての講演が行われ、その後、懇親会が18時から開催されました。

宮城会長は挨拶の中で、「医師の第一歩をどこの病院でスタートするのかと言うのは、非常に大事であり、その医師の一生を決める所になるであろう。医療現場というのはいろいろな事が起こっています。指導医がおり、患者さんがおります。医療をとりまく現場は非常に厳しいですが、一番大事な事は患者から学ぶ事だと思っております。いろいろな事が起こっても、いろいろ



沖縄県医師会会長 宮城信雄 会長

な問題が起こっても、その解決の場というのは医療の現場にあります。幸いにも、大学や、あるいはハートライフ病院（RyuMICの病院）には立派な指導医がおります。その中から、やはりその先生方の生き方を学んで、是非立派な医師に育って頂きたいと思っております。」と述べておられました。



琉球大学医学部附属病院 瀧下修一 院長



研修医1年生代表 伊藤ゆい さん

瀧下修一琉大医学部附属病院院長は、オリエンテーションの初日に宮城会長、真栄田常任理事から素晴らしいお話をいただいた事、またこのような懇親会を沖縄県医師会主催で開いた事へのお礼の言葉を述べられ、また「RyuMIC（琉大医学部附属病院臨床研修病院群）およびRyuMICプログラムに参加している病院の研修医の先生方にも集まって頂くということで初日にした。」とも理由を述べておられました。「RyuMICの由来は、Ryukyu：琉球という地元を愛し、地元を見つめながら、そして、Medical：高い医療と豊かな学習環境・研修環境の中で、Interactive：琉大病院、それから、協力型の病院、診療所が双方向の連携をとりながら、Collaboration：研修医、それから指導医、病院と連携を取る事を願ってRyuMICと名づけたとの事です。そのような交流の意味合いも含め、そしてこれからの研修が非常に素晴らしいものになるひとつの出発点として、この懇親会を盛り上げていただきたい。」と述べておられました。

- Q1. 医師を目指した理由についてお聞かせ下さい。**  
病院にかかることが多く、医師という職業に興味をもったため。
- Q2. 研修施設として琉球大学医学部附属病院を選択されたのには、何か特別な思い入れなどがあったのですか？お聞かせ下さい。**  
個々の患者さんに十分な時間をかけて診ていきたいと思ったため。
- Q3. ご自分の将来をどのように見えていますか？将来像についてお聞かせ下さい。**  
患者さんとしっかりとした人間関係を構築できる医師になりたい。

琉大病院研修医を代表して伊藤ゆい先生より、「私達研修医の為にこのような会を開いていただき、誠にありがとうございます。思えば六年前、医学部に入学いたしまして、夢と希望を胸に6年間ここで頑張ってきました。それ以来、医師になる事を目標に日々努力してまいりましたが、このたび試験に合格し、やっと医師としてのスタートラインに立つことができ、心よりうれしく思います。しかし、喜びとともに責任の重さと不安も感じております。今日から始まる2年間の研修が、将来どのような医師になるか、それを決める大切な時期となる事と思います。新社会人としての自覚をもつと同時に医療に対する熱意を常に忘れる事なく、今後も頑張っていきたいと思っております。まだまだ未熟な私達ではありますが、よろしくお願ひいたします。」と述べていました。



琉球大学医学部 坂梨又郎 医学部長

最後に坂梨又郎医学部長より、「毎年このように、研修医のためにパーティを開いていただき、沖縄県医師会の先生方に心から感謝申し上げます。国家試験等もずい分早くなりまして、すでにその結果も出て、ここに研修医としておられる事がご本人たちより、私の方が夢見たいな気持ちになっております。医師会長先生からもありましたように、どこで研修をするかという事は医師としての一生にとって重要で、大切だとお話がありました。同時に、諸君がまず踏み出していく第一歩を、ここでどのような患者さんに接し、どのように諸君が考えていくということが非常に重要であろうと思います。2年間の初期研修が義務づけられ医学教育が8年になった感がします。医師会の先生、琉大の先生方、先輩方のご指導に恵まれるわけですから、これからの一生の仕事としてつながっていく基礎作りと考えられ頑張っていたきたい。こういう機会を通じて交流を深められるのにお礼を申し上げたい。」と乾杯の挨拶を述べられ、懇親へと移りました。

新卒後臨床研修制度も3年目を迎えました。今年度は早い時期のマッチング、それと前後して卒業試験、早い国家試験があり、4月に医師となり、一ヶ月も早く研修医・社会人としての第一歩を進まれた今日、6年間の医学部を終了したこと、国家試験に合格し無事医師になれた喜びに満ち溢れていました。以前のように、卒業後の一ヶ月間近く、人生で最後の永い休暇も無く、2年間の初期研修に入るわけですが、研修制度そのものについて、大きな不安を抱いてない印象を感じました。まだ、第一ステップを乗り越えた喜び、祝福の余韻の中にいるのか、制度そのものが十分に認知されたゆえでしょうか。卒前・卒後教育が欧米にかなり遅れたとは言え、徐々にその内容がステップアップし、更に、直ぐに(数十年はかから無いと思います)充実していくと思います。研修病院の大切さ(日常診療で多く遭遇する病気を経験し適切に対応する、指導医の一貫性のある指導、プライマリ・ケアにおける研修医のニーズに応じた事例検討・レクチャー)、患者から学び・どのように患者に接し、そしてどのように考えていくか(医療は常に患者と共にある：ウィリアム・オスラー)、諸問題の解決(予防)は医療現場にある、そして医療現場の立派な医師の生き方を学び(メンターとロールモデル)若き医師達の旅立ちへの素晴らしい饞の言葉に感謝すると同時に、若き医師・研修医が会員の諸先生方のもとに来られた折りは日々の診療でご多忙とは存じますが、彼らの良いところを多く引き出し、そして良き医師として成長するようご指導の程よろしくお願いいたします。